



ふるさと納税商品会議
室津の海の資源を活かすアイデア会議は白熱!

GOAL



発表&「サーモンブラン」お披露目
学びの成果を元気に発表。試作品のお披露目も。

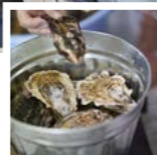


室津の海って どんなところ?

1300年前、『播磨国風土記』に「風を防ぐこと室のごとし」という記述で登場する室津。風や潮の影響を受けにくい瀬戸内の良港として、古くから栄えた。江戸から明治にかけ、日本海と瀬戸内海を経由して北海道と大阪を結ぶ北前船の寄港地として、注目を浴びるよう。地域経済が発展し、現在もたつの市に拠点を置く企業のルーツになっている。



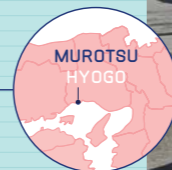
オリジナル海鮮丼づくり
室津名産「播州サーモン」を使って調理実習&美食。



牡蠣いかだ見学
室津の漁業を学んだ後は、船に乗って現場を偵察。

学んで、歩いて、海を知る!

あつまれ 室乃津 探検隊



日本財団が推進する「海と日本プロジェクト」は、次代を担う子どもたちが「海」へ好奇心を持ち、海の将来を自分ごととして考えるきっかけづくりを行っている。今回、「室乃津探検隊」に扮した兵庫県たつの市の子どもたちは、故郷の海についてどんな学びを得たのだろうか?

文/小野泰子 撮影/岡本 寿

START



海の交易を学ぶ
港町の成り立ちや歴史、北前船との関わりを学ぶ。



室津日本遺産探検ラリー
町に散らばる文化財を訪ね班に分かれて出発!



北前船で栄えた港町を 自分の足で歩き、知る

「湾は、意外に小さい。湾の小ささが、室津の風情をいっそう濃くしている」。かの司馬遼太郎が紀行文集『街道をゆく』のなかでこう記した兵庫県の港町・室津。青空が広がった夏の終わり、地元たつの市の小学生21人が4班に分かれ、歴史ある町に繰り出していった。

これは、北前船を通じて日本遺産に認定された町で開催中の海洋教育プロジェクト「海の学校」のワンシーン。廻船問屋の屋敷や、係留する船をつないだ石などの文化財を巡り、クイズに答えていく。地図を頼りに、ときには町の人に道をたずねながら歩くうちに、室津がぐっと身近な場所になったようだ。

海の学校は3日間にわたり開校した。初日は午前中に町を歩き、午後からは漁船に乗り込み牡蠣養殖の現場へ。ホタテの貝殻の中で養殖され、数カ月後の出荷を待つ牡蠣の様子に興味津々の子どもたち。豊かな海がもたらす、豊かな恵みを目の当たりにした。

2日目は、播州サーモンを使ったオリジナルの丼づくりに挑戦だ。コツを教わりながら小骨を抜き、続いて薄くおろしていく。ご飯に盛り付け、思い思いにタレやレモン汁をかけて「いただきます!」。脂ののりがよく、自分で調理した丼のおいしさに笑みがこぼれる。

おいしく楽しい学びから 海の将来を考える

食後は、たつの市のふるさと納税商品についてアイデアを出し合う。海産物のほかに、そうめんや醤油、皮革製品も特産品。4つの班ごとに、これらを生かした新商品を発案しようという時間だ。子どもたちはまさにアイデアの泉。ご飯のお供の「サーモンフレック」や、ペースト状にしたサーモンを使いケーキのモンブランのように見立てた「サーモンブラン」などが発表され、会場は大盛り上がり。最終日には、地元の津田宇水産による試作品が披露され、「見た目もかわいく、味もおいしくて想像以上だった」とサーモンブラン発案班は大喜びだ。播州サーモンは今年度からたつの市のふるさと納税商品に登録され、それとともに子どもたちのアイデア商品のレシピ動画を公開中だ。

今回の海の学校では、漁業従事者の後継者不足や魚食離れなどの問題についても話を聞いた。学びを振り返りながら、「もつと魚を食べて、漁業や海に関心をもつことが、自分たちにできることだと思う」。そう話してくれた子どもたちの眼に、海の明るい将来を感じるのであった。

